校長室だより～燦燦～ №８３３

教職の魅力

2023.8.30

私が好きではない言葉の一つに、ブラック企業やブラック職場がある。学校、特に中学校がブラックと言われて久しい。２０２１年に文部科学省が、教職の魅力を伝える目的でＳＮＳ上で始めた「＃教師のバトン」プロジェクトは、教員により過酷な勤務実態が次々と書き込まれ、いわゆる炎上状態となった。

教員の長時間労働の実態は、国内外の各種の調査からも過労死ラインを超える教員が相当数に上り、心身に深刻な影響を与える異常な状況が明確になっている。大事なことは、このような勤務状況の中で、教員が仕事に対して、どのような意識をもっているかである。

「経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）国際教員指導環境調査」（ＴＡＬＩＳ）の２０１８年報告書がある。そこには、中学校教員の場合だが、現在の勤務校について、「この学校を良い職場だと人に勧めることができる」や「現在の学校での自分の仕事の成果に満足している」などの満足度の割合が、日本はＴＡＬＩＳ参加国・地域の平均を大きく下回っている。世界で最も長時間働いているのに、自らの授業や指導に対する自己評価が低い。そこから、仕事の成果に対して満足していない教員の実態が見える。

また、ある調査では、現在の生活満足度について、「かなり満足している」「やや満足している」の合計が、小学校教員は５１.６％、中学校教員では４８.２％となっている。それに対して、民間企業労働者では５４.２％である。小中学校における長時間労働の教員は、労働以外の自らの生活時間が少ないことから、ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）を欠き、結果として生活満足度が低い結果となっているのかもしれない。

その一方で、教員として子どもたちとの関わりや学校生活において、大きな喜びや感動を覚えた体験は数多くあり、そのことが教職の魅力となっていることは否定できない。文部科学省の調査では、増加傾向にあるものの、教員の離職率はそれほど高くはない。

子どものためであれば、どんな長時間勤務も良しとするという働き方は、教師という職の崇高な使命感から生まれるものである。だが、その中で教師が疲弊していくのであれば、それは、子どものためにはならない。

教師のこれまでの働き方を見直し、教師が日々の生活の質や教職人生を豊かにすることで、自らの人間性や創造性を高め、子どもたちに対して効果的な教育活動を行うことができるようにしなければならない。先生方を取り巻く状況が、教職の魅力を消してしまわないようにしなければならない。これは、極めて重要な問題である。